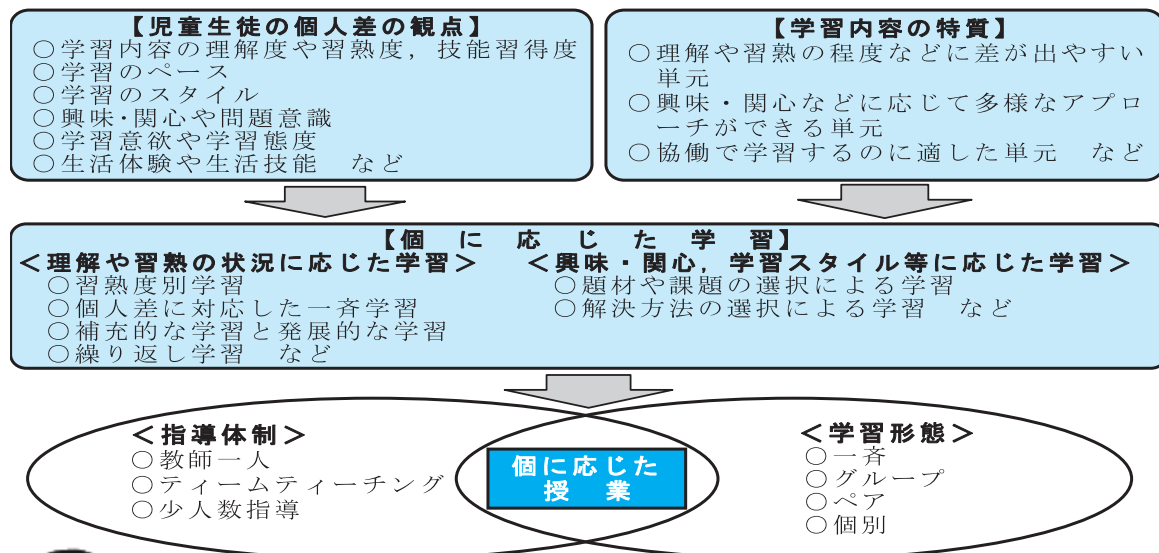


2 授業展開を工夫しよう

(1) 個に応じた授業を工夫しよう

児童生徒はそれぞれ能力・適性，興味・関心等が異なっており，学習への取り組み方に違いがある。そのため，学習内容の特質も考慮しつつ，実態に応じた適切な指導方法を工夫していくことが必要である。



どのような指導体制の下でも個に応じた授業に努めることが大切です。
教師一人による一斉学習を進める場合でも，個に応じた手立てを工夫しましょう。

【学習形態の例】

小単元 <4年算数> 「広さを調べよう」	学 習 活 動	学習形態 例1 ■一斉学習中心 ○単元末に診断を行い定着を図る。	学習形態 例2 ■習熟度別少人数指導 ○小刻みに診断を行い定着を図る。	学習形態 例3 ■課題別集団・T T ○体験的な学習等の場面で課題を選択する。
1 面積	広さ比と単位面積による数値化 1 cm ² の理解と，面積の意味理解 長方形，正方形の面積の求め方の公式化 面積の公式を用いた求積	一 斉	一 斉	一 斉
(復 習)	求積の定着	(習熟・補充)	診断・選択 補充問題 発展問題	(習熟・補充)
2 大きな面積	「m ² 」や「km ² 」の単位 単位の利用 身近な物の面積の測定 「a」や「ha」の単位	(習熟・補充)	一 斉	選 択 課題A 課題B
(復 習)	単位の定着	(習熟・補充)	診断・選択 補充問題 発展問題	(習熟・補充)
3 面積の求め方のくふう	かいだん型の求積 他の図形の求積	(習熟・補充)	一 斉	(習熟・補充)
(復 習)	練習問題	診断・選択 補充問題 発展問題	診断・選択 はりきりコース しっかりコース	診断・選択 補充問題 発展問題

【個に応じた手立て】

- 必要に応じて自由に選択できる課題解決のための資料・情報などの準備。
- つまづきやすい学習内容に対応するヒントカードなどの工夫。
- 個人差に対応した複数コースの練習問題の準備。
- 「何が分かって、何が分からないか」を明確にする自己評価シートの工夫。
- グループ学習の場の設定。
- 評価の観点を明確にした机間指導。 など

【少人数指導やT・Tの留意点】

- 少人数指導の実施内容や意図などを保護者に説明し理解を得ておく。
- 学習コース等の選択にあたっては、ガイダンスを丁寧に行い、適切な助言をする。
- 少人数指導のグループ構成が固定化しないように配慮したり、学習コースのネーミングを配慮するなど、劣等感や優越感が生じないように努める。
- 教師間の打合せ時間を確保し、効果的な指導方法や評価方法、児童生徒の実態等について共通理解を図る。

(2) 基礎的・基本的な知識・技能の習得と活用を図る学習を工夫しよう

① 発達や学年の段階に応じた指導をする

- 小学校低学年から中学年まで
「読み・書き・計算」の能力を育成するために、体験的な理解や具体物を活用した思考や理解、反復学習などの繰り返し学習を工夫する。
- 小学校中学年から高学年にかけて以降
体験と理論の往復による概念や方法の獲得、及び討論・観察・実験による思考や理解を重視するといった指導の工夫をする。

② 授業を三つの場でとらえる

習得と活用を図る学習を進める上で、授業を三つの場でとらえるのも有効である。

主として習得を図る学習は、「教える場」と「考えさせる場」とする。教えるべきことを明確にしてしっかりと教え、教えたことの定着を図るために考えさせるなど、両者を関連付けながら確実な習得を図ることが重要である。

主として活用を図る学習は、「考えを深める場」とする。習得した知識・技能を活用して課題に取り組み、討論などにより考えを深める学習の充実が重要である。

授業の三つの場	指導内容の例（小1 国語）	指導上の留意点
教える場 基礎的・基本的な知識・技能を明確にして、分かりやすく教える場	主として習得を図る ○絵を用いて「5W1H」を組み合わせた文の作り方を教える。 ・提示した絵から「いつ」「どこで」「だれが」「なにを」「どうした」にあたる言葉を探させて教える。 ・絵の場景が読み手に伝わるように表現方法を教える。	・教師主導で教える場合も、児童生徒と対話したり発言や挙手をさせたりして言語活動を充実し、理解の状況を把握しながら進める。 ・教材、教具、操作活動などを工夫し、分かりやすく教える。
考えさせる場 教えた知識・技能を用いて、課題に取り組ませる場	○異なる絵で、「5W1H」を使った文を考えさせる。 ・5W1Hにあたる言葉と場景を表す文を考えさせて書かせる。 ・どのように考えて文を作ったのか説明させる。	・絵を変えて、教師の教えたことが理解できているかを確認できるような学習活動を工夫する。（教えたことを使って書かせる、説明させるなどの言語活動を充実する。）
考えを深める場 習得した知識・技能などを活用して課題に取り組み、話し合いなどにより考えを深める場	主として活用を図る ○「5W1H」で文を作る方法を、他の場面や学習で活用させる。 ・見学や行事で分かったことや伝えたいことなどを文で表現し、伝え合う。また、聞き手・読み手にきちんと伝わる文になっているか、話し合って改善する。	・習得した知識・技能の有用性が感得できる課題に取り組ませる。 ・互いの考えを伝え合い、改善のための話し合いをするなどして考えを深めさせる。 ・考えを深めさせ、知識・技能を活用する力を育てるため、言語活動を特に充実する。

【三つの場でとらえた授業の例】

＜単元構成＞ 中1理科「大地の変化」（22時間扱い）

小単元名	学 習 内 容	時間
1 火山	①火山はどんな活動をするのか。	2
	②マグマが固まるとどんな岩石になるのだろうか。 ・火山岩と深成岩のつくりの違い ・火山岩と深成岩のでき方の違い ・火成岩の色合とふくまれる鉱物	5
	③地震とはどのようなものなのか。 ・地震による地面のゆれ方 ・地震の波の伝わり方	2
	④地震の大きさは何で表すのか。	1
2 地震	⑤地震によってどんな現象が起こるのか。	1
	⑥日本の地震はどのようなところで起こるのか。	1
	⑦地層はどのようにしてつくられるか。	1
	⑧地層の観察（地層のつくり、地層の広がり、断層・褶曲）	3
3 地層	⑨堆積岩と化石を調べよう。 ・地層をつくる岩石（堆積岩） ・堆積岩や化石から分かること ・地層の年代を示す化石	2
	⑩地層の観察結果から地層のでき方や当時の環境を推定する。	1
	⑪地震や火山の活動はなぜ起こるのか。	1
	⑫高い山はどのようにしてできるのか。	1
4 大地の変動		
まとめ	総括的な評価をし、補充する。	1

3 地層 ⑦地層はどのようにしてつくられるか。

（学習問題）地層はどのようにしてつくられたのだろうか。

教える場

- ◆風化した泥岩やグランドキャニオンの写真などを提示し、「風化や侵食の作用」に気付かせる。
- ◆「風化」、「侵食」の用語と「風化や侵食の作用」を教える。
- ◆堆積の実験方法を教え、実験させる。

〈実験ア〉 ペットボトルに水、れき、砂、泥を入れ、よく振ってから静置する。
〈実験イ〉 メスシリンダーに水を入れ、れき、砂、泥を混ぜたものを上から落とす。

- ◆実験結果から、粒のしずみ方や積もり方に気付かせ教える。

考えさせる場

- ◆実験結果を自然界に当てはめ、土砂の堆積について考えさせる。
- ◆「風化や侵食の作用」と土砂の「堆積」を連続的にとらえて考えさせる。
- ◆地層は、どのような場所に、どのようにして堆積するかを考えさせ、説明させる。

3 地層 ⑩地層の観察結果から地層のでき方や当時の環境を推定する。

＜活用させる知識・技能など＞

- ①火山の大規模噴火により、火山灰や軽石が吹き上げられ海底や陸地に堆積する。
- ①②火山灰や軽石、火成岩に含まれている鉱物（セキエイ、チョウ石、クrownモ等）とその特徴。
- ⑦風化や侵食で岩石が、れき、砂、泥などになり、流水に運ばれ、海底などに堆積し地層をつくる。
- ⑧露頭の観察、スケッチにより調べた特徴。
- ⑨堆積岩のつくりと構成物質（粒の大きさ、形、集まり方など）。
- ⑨堆積岩や化石からわかること（示相化石、示準化石）。

考えを深める場

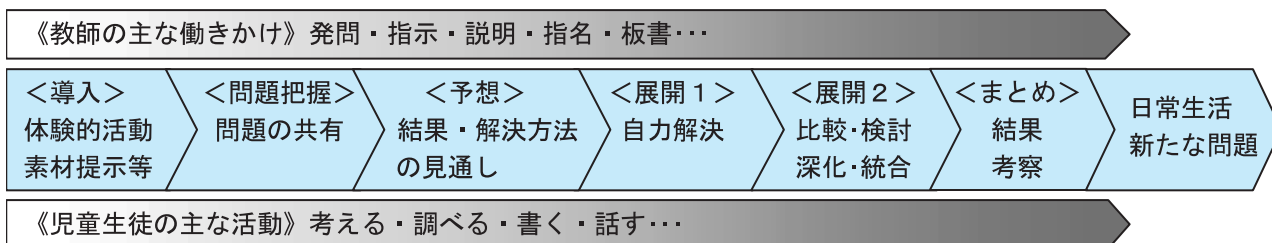
（学習問題）以前に観察した地層は、いつ頃、どのような環境の下で堆積したのだろうか。

- ◆習得した既習事項を活用して、地域の地層の観察記録から過去の堆積環境や地層のでき方を推定する。
- ◆各自の考えを、筋道立てて論述する。
- ◆話し合いや文献・資料等により意見を評価し、考えを修正する。
- ◆課題に対する結論をまとめる。

3 授業スキルを高めよう

授業は、「教師の働きかけ」と「児童生徒の活動」が有機的に関連しながら展開する。このため、授業を効果的に展開できるような、授業スキルの向上が求められる。

【1 単位時間の授業展開のイメージ図】



（１）発問の働きを考えよう

発問は、授業のねらいに向けて児童生徒の思考を促す原動力となる。発問の働きを自覚し、使い分けることにより、効果的に授業を組み立てることができるようになる。

【発問の分類】

＜形 式 的 発 問＞	
＜拡散的発問＞	①答えが複数あり、「問い」「答え」的な発問 興味関心を高めたり、問題意識を共有化したりする。
	②答えが1つで、「問い」「答え」的な発問 必要な情報の確認、取出し、整理などをし、考える内容を明確にする。
＜集中的発問＞	③答えが複数あり、「考え方」や「可能性」を引き出す発問 多様な思考をさせたり、様々な考え方があることに気付かせたりして、思考力や表現力を育てる。
	④答えが限定され、「考え方」や「妥当性」を答えさせる発問 多様な考え方を比較検討したり、妥当性を考えさせたりして、思考力、判断力や表現力を高める。
＜内容（意味）的発問＞	

【発問例】

①の例

「絵を見て気付いたことは何ですか」「○○について調べたいことは何ですか」

②の例

「この物語の登場人物はだれですか」「分かっていることは何ですか」

③の例

「いろいろな解き方を工夫してみましょう」「なぜこのようになると思いますか」

④の例

「どちらが正しいといえますか」「考え方が同じものを仲間にしましょう」

(2) 作業指示を入れて発問をしよう

発問に続けて、具体的な作業指示をすることにより、児童生徒は目的意識をもった活動をすることができる。

【作業指示を入れた発問の例】

「絵を見て気付いたことをノートに五つ書きなさい。」

「この物語の登場人物はだれですか、発表しましょう。」

「いろいろな解き方を工夫してみましょう、自分の考えをノートに書きなさい。」

「どちらが正しいといえますか、理由をあげながら友達と話し合いましょう。」

制限時間や目標の数値を示すと、より具体的になり、集中した活動につながります。
例えば、「5分で考えましょう」「40字以内で書きましょう」など数字を入れて、作業指示をしましょう。



(3) 分かりやすい板書を工夫しよう

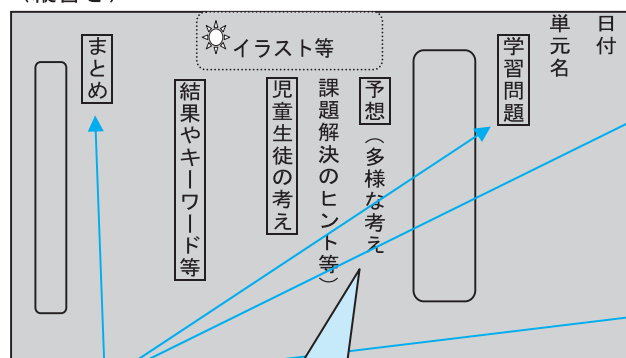
授業の経過や児童生徒の思考の流れが分かるように、何を、いつ、黒板のどの位置に、どのように書くかを決めて授業にのぞむことが必要である。

【板書をするときの留意点】

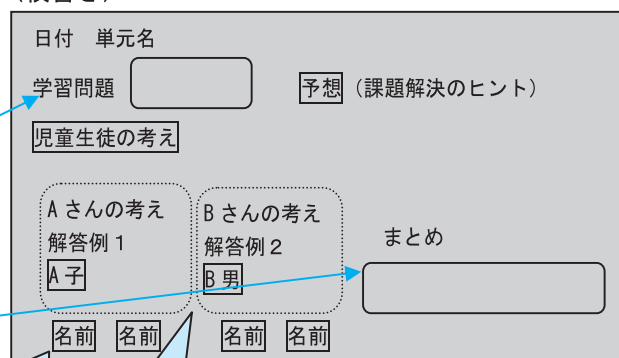
- 最後部や最前列の両端に座る児童生徒から見える位置かどうかを考えて書く。
- 思考の流れが分かるように、児童生徒の意見などは必要に応じて分類して位置を分けたり、まとめたりして書く。
- 正しい筆順で書き、文字の大きさや書くスピードを配慮する。
- 目的別に色チョークを使い分けるとともに、見やすい色にする。
- 改行するときは単語や文節を分断しないようにする。

【板書の例】

(縦書き)



(横書き)



「学習問題」と「まとめ」の外枠は、色チョークを決めて、分かりやすくしましょう。

「予想」や「児童生徒の考え」は、画用紙や短冊黒板に書かせて、貼ってもよいでしょう。

一人一人の名前を書いたマグネットシートを用意して、同じ考えのところに貼らせると、学習意欲が高まります。

児童生徒に直接書かせると、児童生徒の参加型の板書になります。

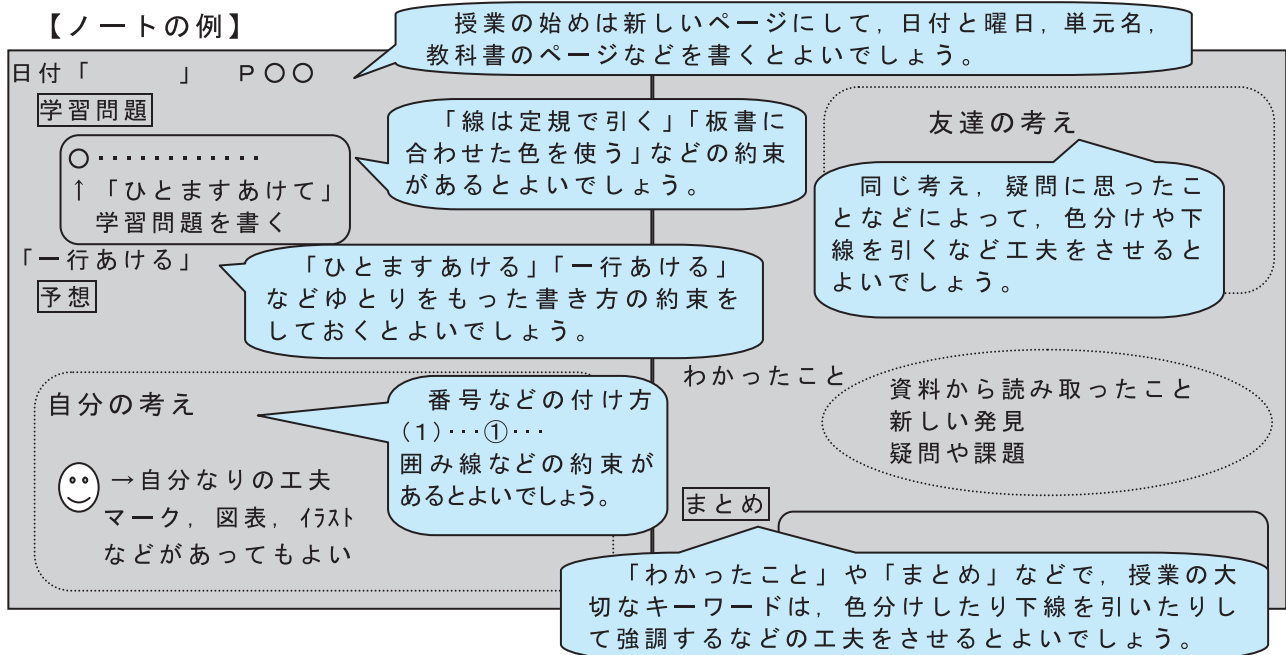
キーワードや重要語句は、色を決めたり、下線を引いたりするなどの工夫をするとよいでしょう。



（４）学習の足跡が分かるノートにしよう

思考を広げ、必要なことが書いてあり、見て分かるノート，児童生徒が読み直したくなるノートをつくり上げるように，指導をすることが大切である。

【ノートの例】



【ノート指導のチェックポイント】

- 基本的な約束を決めて，その指導を繰り返し徹底している。
- 児童生徒の創意工夫を生かすようにページにゆとりをもたせている。
- 思考の過程が見えるように，誤答や自分の考えを消さずに残す指導をしている。
- 書く時間を保障している。
- 丁寧で分かりやすいノートや自分なりの工夫をしているノートを紹介している。

（５）授業を活性化させる指名を工夫しよう

教師の指名の仕方によっては，授業への参加意欲や態度，授業の流れが変わってくる。授業の場面に応じた方法を工夫したい。

【指名の仕方とポイント】

- 「発問→指示→児童生徒の思考→指名」を一つの流れととらえる。
- 「挙手させてから指名」と「挙手させずに指名」を意図的に使い分け，授業を組み立てる。
- 指名は，「少数意見から多数意見へ」や「易しい考えから難しい考えへ」など，意図的に行う。
- 「既習事項の確認」や「まとめ」など，場面によって，列指名，班指名，計画的指名，挙手指名，起立指名，指名なし発言，などを使い分ける。
- 指名後の発言には，うなずきや言葉かけにより，承認や励まし，賞賛をする。